

青空を知らない治癒師は、
敵国の男たちに囚われる



KirR

【ご注意】

本作は成人向け作品です。十八歳未満の方の閲覧・購入はご遠慮ください。

※以下の描写を含みます。誘拐・監禁／同意のない性行為／複数名との性行為／残酷描写

※作中の行為や思想を肯定・推奨するものではありません。

※この物語はフィクションであり、実在の国・人物・団体とは一切関係ありません。

本作品の無断転載・複製・再配布を禁じます。

青空を知らない治癒師は、
敵国の男たちに囚われる

K
i
r
R

「んっ、あっ！ あう……あっ、ああっつ！！」

床に突っ伏すアクアの体の中を、熱い肉棒が出入りしている。漏れ出る吐息は明らかに熱を帯び、銀青色の長い髪が乱れている。

アクアは自身を囲む人々に目を向ける。無機質な壁に沿って整列する彼らは、ただ感情のない目でじっとアクアを見下ろしている。

（なんで、こんなことになったんだろう……）

ぼんやりとした頭でアクアは思う。これは子供を授かるための行為で、愛に溢れた尊いもの。しかしここに愛はなく、子を授かる目的もない。

決して許してはならない、忌むべき行為のはずなのに――

アクアの体内に、びゆるびゆると熱いものが注がれる。アクアはただ、この熱を受け入れることしかできなかった。

太陽の光が降りそそぎ、爽やかな風が草木を揺らす。鳥たちが舞い踊る薄緑色の空を見上げ、アクア・ヒーリアは小さくため息をつく。

（いつになったら終わるんだろう……）

王宮の庭はこんなにも平和だというのに、遠くからはドンドンと砲弾の音が聞こえてくる。立ち上る煙を見ると、この仮初の平和がいつまで続くのか、アクアはふっと不安になる。

アクアは気持ちを切り替えようと、ふるふると首を横に振る。考えたところで、治癒師であるアクアにはどうにもできないことだ。

「よしっ、仕事がんばろ！他に元気がない花は……」

「アクアー！」

遠くから聞こえた声に、アクアはくると振り返る。稽古場の方に目を向けると、紺色のローブを着た男性がぶんぶんと手を振っている。反対の手は金髪の青年の腕をつかみ、無理やり引っ張っているようだ。

「いたいた！ アクア、ヴィリ殿下が怪我しちゃったから治してよ」

「平気だっつってんだろイデイス！ 離せ！！」

「兄さん……。殿下をぞんざいに扱わないで。不敬でしょ」

「だって、殿下が治さなくていいって言うんだもん。無理やりにも連れてくるよねー」

イデイスは青い髪を揺らし、呆れ顔で首をかしげる。^{あき}イデイスとヴィリはアクアの前で足を止め、ヴィリは緑色のマントを揺らしてイデイスの手を振り払う。

「これくらいかすり傷だ」

「兄を擁護するわけではありませんが、小さな傷から大きな病気につながることもあります。傷を拝見してもよろしいですか？」

アクアが諭すように言うと、ヴィリはばつが悪そうに黄緑色の瞳を逸らす。イデイスがにやにやと笑っているが、アクアもヴィリも特につっこまない。

ヴィリは大人しく、つかまれていた方と逆の腕をアクアに差し出す。アクアは切り裂かれた白い袖を捲り、傷口を見る。小さな切り傷に見えるが、滲んだ血が今にも流れ出しそうだ。

アクアはその傷に、そっと手を翳す。すると、アクアの手から薄青い光が降りそそぐ。傷はみるみるうちに薄くなり、初めから怪我などなかったかのように元通りになった。

「はい。これで大丈夫です」

アクアが青い瞳を細めて笑うと、ヴィリは恥ずかしそうに、ツンツンとした金髪を揺らす。

「……ありがとな」

「んもー！ 殿下ったら照れちゃってえ！」

イデイスが茶化すように、ヴィリの背中をバンバンと叩く。アクアは「なんでそんなオバさんみたいな喋り方なの？」と思うが、面倒くさいので無視する。

ヴィリは不機嫌そうに眉根を寄せ、イデイスの腕を乱暴に振り払う。

「うるせえ！　つかアクアに頼ってないで、テメーも手当くらいしろ！」

「同じヒーリア家でも、治癒の力は女性しか使えませんでー」

「応急処置くらいできるだろうが！　ったく」

ヴィリは苛立った様子でマントを翻し、稽古場へと足を向ける。イデイスは呆れるように

肩をすくめる。

「殿下も熱心ですよー。戦う予定もないのに剣の稽古とは」

「寝言いつてんじゃねーぞ。テメーにはあの空の色が見えねーのか」

ヴィリが足を止めて空を見上げる。アクアもつられて上を向くと、空は先ほどまでと変わらず、一面薄緑色に覆われている。

ヴィリはつり上がった目を細め、忌々しいまいまそうに空を睨にらむ。

「父上の結界がある間は、この国は戦争の真つ最中だ」

ヴィリの心を映すように、乾いた風が通り抜ける。アクアは耳にかけた髪を押さえながら、舞い上がる花びらを見送った。

温暖な海に浮かぶルクス島は、かつては一つの平和な国だった。ところが約六十年前、王に仕えていた「矛の騎士」の裏切りにより、南北に分裂する。北側を占領した矛の騎士は「ルベル国」を建国し、己の持つ矛の力で、王宮のある南側に攻め入ろうとした。

そのとき南側を守ったのは、矛の騎士と共に王に仕えた「盾の騎士」だ。盾の騎士は盾の力で、島の南側を覆う結界を張った。その後、王は矛の騎士から受けた傷により亡くなり、盾の騎士が王妹と結婚して新たな王となった。それがアクアの住む、「ヴェール王国」の成り立ちである。

六十年近く経った今でも、ヴェール王国は国王の結界によって守られている。結界の中は

平和そのものであり、国民の多くが戦争のことなど忘れている。しかしヴィリの言う通り、「結界がある間は戦争の真っ最中」なのだ。

（その結界を維持するために、叔母様……国王専属治癒師が、王の体力を癒やし続けている。私もいつか叔母様の後を継いで、陛下を支えることになるのかな……）

アクアはぼんやりと王宮を見上げる。王族であるシールズ家を象徴する緑色の屋根は、薄緑色の空をより濃く見せている。

そのときだった。ちょうどアクアが見ていた方角から、パンツと爆発のような音が響いた。大きな音ではなかったが、ヴィリとイデイスも気づいたようで、アクアと同じ方向に目を向ける。

「何の音だ！？」

「爆発ですかねえ。煙は見えませんが」

悠長に構えるイデイスの答えを待たず、ヴィリは王宮に向かって走り出す。同時に、アク

アも同じ方向へ踏み出そうとする。

「アクアはここで待ってる！」

ヴィリが振り返って言うが、アクアは気丈な声で「いいえ！」と返す。

「私も行きます！ 怪我人がいるかもしれません！」

「けど、もし事件だったら……」

「大丈夫です！ 私は傷つきませんから！」

アクアが生まれたヒーリア家では、女性であれば必ず癒やしのがが発現する。アクアは特に強い力を持ち、傷を受けたと気づく前に癒えてしまう。

アクアの力のことは、ヴィリもよく知っている。ヴィリは小さくうなずき、二人は王宮へと駆け出した。

音がしたのは王宮の最上階、アクアの叔母である国王専属治癒師の部屋の方だった。その

道中は負傷兵で溢れ、ただならぬことが起こっているのは明らかだ。

アクアは彼らを癒やししながら、急いで叔母の部屋へと向かう。白く美しい治癒師の装束しょうぞくは、タイトなドレスと大差なく、走りづらい。

（きっと大丈夫……。叔母様は私と同じで、強い癒やしの力がある。怪我なんてしないはずだから……）

叔母の部屋が見えてきたとき、その扉は開いていた。アクアは祈るような気持ちで、ヴィリと共に部屋に足を踏み入れる。

目に入った光景にアクアは絶望する。祈りは届かず、叔母は一糸まとわぬ姿で、一面の赤の上に横たわっていた。

「叔母様！！」

「待て、アクア！」

叔母に駆け寄ろうとしたアクアをヴィリが制する。ヴィリは白い服が汚れるのも構わず叔

母に近づき、赤い池に膝をつく。ヴィリは叔母の首筋にそっと触れ、静かに首を横に振った。

アクアは無意識に口元を覆う。「首を落としても死なない」とまで言われた叔母のあつきりした末路に、まだ頭がついていかない。しかしヴィリの表情と広がる赤、そして叔母の胸にあいた刺し傷が、目の前の出来事が現実だと伝えてくる。

（一体、誰がこんなことを……）

アクアは顔を上げ、叔母の部屋の中を見渡す。そのとき、アクアは部屋の構造に違和感を覚える。

（この部屋の扉……なんで鍵が外側についてるんだろう）

室内の人間が外に出られるよう、通常は鍵を内側につけるはずだ。外側についていたら、中の人が閉じ込められる可能性がある。

他にも不自然な点はある。奥まった場所、妙に高い位置にある小さな窓、止め紐のない

天蓋、ここに来るまでに会った兵の数。

(まるで、閉じ込めるための部屋みたいな……)

そう思った瞬間、アクアの背後の空気がゆらりと揺れる。アクアが振り返ろうとすると、それより早くヴィリにぐっと腕を引かれた。

キンと、刃がぶつかる高い音が響く。何が起きたのか理解できないアクアの前で、ヴィリと黒服の青年が刃を交えていた。

(誰……!!? どこから出てきたの!?)

黒服の青年の姿を、アクアは王宮で一度も見たことがない。高く括った長い髪も、眼帯で隠してもわかる端整な顔立ちも、見たらきつと忘れないだろう。それに赤い裏地のマントはヴェール王国兵のものではなく、部外者であることは明らかだ。

ヴィリと青年が同時に距離を取る。ヴィリは青年に剣を向けたままアクアに叫ぶ。

「アクア逃げろ! こいつはルベル国軍だ!!」

「え！？」

（どうやって結界の中に！？）

アクアはずっと王宮の庭にいたが、結界が途切れるところも、壊れるところも見えない。結界を通過できるのは、盾の力を持つ者だけだ。盾の力はシールズ家の血を引く者しか持たず、ルベル国にはいないはずだ。

しかし青年の深紅の右目が、伝え聞いている矛の騎士の姿と重なる。青年がルベル国の、それも矛の騎士の血を引く人間であることは疑いようがない。

混乱するアクアを置いたまま、ヴィリは床を蹴り青年に突進する。ヴィリが剣を振り下ろすが、青年は軽い動作でそれを躲す。かわ

青年がヴィリの背後に回り、剣を突き立てようとする。しかしヴィリが盾を張り、緑色の壁が青年の刃を阻む——はずだった。

青年の剣が、緑色の壁をするりと抜ける。驚く暇もなく、ヴィリの背中に銀色の刃が深々

と突き刺さった。

「ぐあつ……………!!」

ヴィリが呻き声うめをあげる。青年が刃を引き抜き、ヴィリはその場に倒れ込む。ヴィリの背中が、みるみるうちに赤い色に染まっていく。

「殿下!!」

アクアは咄嗟とっさにヴィリに駆け寄り、癒やしの光で傷を包む。しかし血が止まることはなく、傷が塞がる様子もない。

（回復しない……………なんで!?!）

焦るアクアに、ヴィリが震えながら手を伸ばす。

「アク、ア……………にげ……………ろ……………」

その言葉が終わらないうちに、アクアに黒い影が覆いかぶさる。振り返る間もなく口を塞がれ、全身を黒い布に包み込まれた。

（殿下——っっ！！）

そう叫んだつもりなのに、外に出る音は「ン——！！」だけだ。

腰をつかまれ、アクアの体が宙に浮く。担がれているような感覚があるが、閉ざされた視界では自分の身に何が起こっているのかわからない。

（もしかして、誘拐されてる……！？）

そう察してアクアは藻搔^{もが}くが、状況が変わることはない。抱える腕の力は強く、アクアがいくら暴れてもびくともしない。

しばらくして、アクアの体が横たえられる。感触はソファに近いだろうか。再び暴れて逃げ出そうとするが、手足を拘束され身動きが取れなくなる。

バンツと二回大きく鳴った後、馬の鳴き声とも違うブロロという音と共に、体が大きく揺れはじめる。

馬車の揺れに近いが、蹄^{ひづめ}の音は聞こえない。乗り物で移動している気はするものの、アク

アにはその正体がまるで想像できない。

アクアはただ、揺れが収まるのを待つことしかできなかった。

揺れと音が収まり、アクアは目的地に着いたのだと理解する。視界を奪われたままのアクアには、ここがどこなのかまったく想像ができない。煙の匂いがする気がするが、それも布の匂いでよくわからない。

（ルベル国軍が結界を抜ける手段を持つてゐるなら、ルベル国に連れてこられたかもしれないのよね……。けっこう時間が経った気がするし、かなり遠くまで来てるかも）

バンツと、出発時にも聞いた大きな音が鳴り、ざりざりと土を踏む音が聞こえる。聞いたことのない重い足音は、ここがヴェール王国ではないからか、あるいは靴の材質の違いだろうか。

ガタンと一つ揺れたかと思うと、アクアの腰がつかまれ体が浮き上がる。どうやら小脇に

抱えられたようだ。再び聞こえたバンという音は、乗り物の扉を開めた音かもしれない。

それからまた土を踏む音を聞いていたが、足音はすぐにコツコツと石を踏む音に変わる。しばらくして、コンコンと分厚い扉をノックする音が聞こえる。

「入りなさい」

くぐもって聞こえる声は、扉の厚みゆえか、アクアが布を被^{かぶ}っているためか。ギイと扉が開く音が聞こえ、やがてゆっくりと閉まる重い音が響く。

ようやくアクアの足が床に触れる。誘導に従い床に膝をつく、ひんやりとした温度が布越しでも伝わってくる。次の瞬間、アクアを覆っていた布が勢いよくはぎ取られた。

眩^{まぶ}しさが目に刺さり、アクアはゆっくりまぶたを開く。視界に入った光景に驚き、アクアはパチパチと瞬^{まばた}きを繰り返す。

(「ハ」……どこ?)

塗装されていない灰色の壁は、おそらく石ではなくコンクリートだ。床も同じ材質で、ア

クアは目を丸くする。コンクリートはヴェール王国では失われた技術で、目にすることは非常^{まれ}に稀だ。

その無機質な壁に沿って、無表情の大人たちが整列している。皆アクアを攫^{さら}った青年と同じ黒服で、それが組織の制服なのだと理解できる。正面には小上がりのような段差があり、そこにはいかにも上位者といった壮年の男性が、重厚な木製の椅子に足を組んで座っている。

男性の真っ赤な瞳に、アクアはぞくりと肩を震わせる。

（この目……。この人も矛の騎士の……!?!）

見知らぬ黒服の人々、見知らぬ建築様式、鉄と煙の匂い、そして不気味に輝く赤い色。どこを切り取ってもヴェール王国にはないもので、アクアはここがルベル国であることを確信する。

椅子に座る男性は柔らかく微笑み、膝の上で優雅に指を組む。

「サファイアのような青い瞳……報告通りだね。無体^{むたい}を働いて申し訳ない。私はルベル国軍最高司令官、レドラー・グレイヴ。君は治癒能力を持つ、ヒーリア家の人間で間違いないかな？」

アクアは無言のまま、レドラーと名乗る男性を睨む。レドラーは視線を気にする様子もなく、腰に下げたポーチに手をかける。

「答えたくないならそれで構わないよ。調べることは容易^{たやす}いからね」

レドラーが武器と思われる筒状のものをアクアに向ける。引き金が付いたそれは銃のように見えるが、アクアが知っている物と比べてずいぶんと小さい。

レドラーが引き金を引き、パンツと爆発に似た音が鳴る。それが叔母の部屋から聞こえたものと同じ音だと気づくと同時に、アクアの右腕に違和感が走る。しかしそれが痛みだと認識する前に、すっと消えていく。

無表情だった周囲の人々が、驚いたように目を見開く。レドラーは興味深そうに「へえ」

とうなずいている。

「そんなにすぐに治るんだ。想像以上の力だね」

レドラーは拳銃らしき武器をしまいながら、アクアの後ろに目を向ける。アクアはその視線で初めて、自分の後ろに人が立っていることに気づく。振り返るとそこにいたのは、ヴェール王国で見たあの青年だった。

「本物で間違いないみたいだし、早速はじめてくれるかな、スカル」

スカルと呼ばれた青年に、アクアはぐっと肩をつかまれる。次の瞬間、アクアの頭は床に押し付けられていた。

何が起こったのか、理解する暇もなかった。アクアは尻を高く上げた状態で、床にうつ伏せになっているようだ。床と激突したときに痛みが走ったが、ほとんど感じる間もなく引いていく。それよりは、メロンほどの大きな乳房がつぶれる圧迫感の方が強い。

（はじめるって、一体なにを？ 殺すつもりではなさそうだけど……）

アクアを殺すのならば、ヴェール王国で叔母のように切り捨ててしまえばいい。わざわざルベル国に連れてくる必要はない。しかし他に思い当たる理由はなく、警戒するアクアの首筋に一筋の汗が伝う。

スカルのものと思われる手が、アクアの足首に触れる。そのまま足をつかまれると思い、アクアはびっくりと身を固くする。しかし次に起こった予想外のことに、アクアの思考が一瞬止まった。

スカルの手がアクアの装束の裾をつかみ、腰まで一気に捲り上げたのだ。

(は……え???)

状況を理解できず、アクアはぼんやりとしてしまう。しかし自分が下半身を露出していることに気づき、アクアは羞恥しゅうちに顔を染める。はたから見ると、アクアはスカルの目の前に、裸の尻を突き出しているのだ。

「ちよ……っと、待ってください！ 一体なにを……」

「あ、やっと喋ったね。綺麗な声じゃないか」

アクアが顔を上げると、レドラーはにこにこ楽しげに笑う。

「ヒーリア家の女性を手に入れて、グレイヴ家がやることなんて一つしかないよね。まさか知らないのかい？」

「どういう……ふえっ!？」

疑問を口にしようとしたとき、アクアの豊かな尻が大きな手に包まれる。その手は円を描くように双丘を揉みながら、徐々に股の間に向かっていく。そしてその手は躊躇なく、アクアも触れたことのない秘部に触れた。

「ひっ……!」

アクアは自分の顔から、さっと血の気が引いたことを自覚する。スカルの指が割れ目を左右に開き、入り込む空気の冷たさに、アクアの背筋がぞわりと震える。

ここから何をされるかわからないほど、アクアは鈍感ではない。そして予想通り、開かれ

たそこに異物が押し込まれた。

「いっ、たあ……っ！」

想像以上の痛みにアクアは目を閉じる。すぐに傷が治るアクアは、人より痛み慣れている。

アクアの反応に、レドラーが気の毒そうに眉尻まゆじりを下げる。

「使われていないのか……。それは申し訳ないことをした。スカル、痛そうだから舐めてあげて」

異物が体内から出ていき、アクアはほっと息をつく。しかし安心したのも束の間、ざらりと濡れたものが敏感な突起に触れる。

「ひゃあ！」

それがスカルの舌の感触だと気づいたのは、先ほどレドラーが「舐めてあげて」と言ったからだ。生温かさがそこを包み、チュウチュウと吸うように唇でつままれる。感じたことの

ない違和感に、アクアはぎゅっと目をつぶる。

やがて下腹部に、じくじくとした感覚が広がる。その正体にアクアが困惑していると、舌が移動し、先ほど指が挿入されたところに触れる。チロチロと縁をなぞられ、アクアの腰がびくんと跳ねる。

「ふ……んんっ、うん……っ」

（なんか、変な声出そう……っ）

徐々に下半身が重くなり、アクアは無意識に腰を揺らす。そのアクアの耳に、レドラーの穏やかな声が降りそそぐ。

「本当に知らなそうだから教えてあげるよ」

アクアは下腹部の違和感に耐えながら顔を上げる。レドラーは色気も興奮もなく、涼しい顔でアクアを見下ろしている。

「ヴェール王国の結界が、なぜ国土全体を覆う大きさを保ち、我らルベル国軍の攻撃に耐え

られる強度を持つてるか知ってるかい？」

「国王専属治癒師が、癒やし続けているからでは……」

「うーん、そうとも言えるかな？　でも、正確な表現ではないね。シールズ家の盾の力も、私たちグレイヴ家の矛の力も、本来はそれほど強い力ではない。どれだけ強くても、王宮を覆う程度がやっとじゃないかな」

「え……？」

驚くアクアに、レドラーは不敵な笑みを向ける。

「盾と矛の力は、ヒーリア家の女性と交わることで大幅に強化される。そして同時に体力の回復もなされるから、あれほどの結界を長時間、途切れることなく張り続けていられるんだ」

あまりの衝撃に、アクアは声も出せなくなる。アクアの脳内に、優しい叔母の笑顔が浮かぶ。

(じゃあ叔母様は、陛下に……)

信じられない気持ちで、アクアは反論の材料を探す。しかし一つも思いつかず、むしろ肯定するような光景が次々と頭に浮かぶ。全裸で倒れていた叔母、不自然な窓、外からしかかからない鍵。そのどれもが、レドラーの言葉を裏付けるもののように思えてくる。

(そんな……。じゃあヒーリア家は、六十年も王家に騙されてたってこと……?)

アクアの頭が真っ白になる。しかし感傷に浸る暇は与えられず、アクアの秘部にぐつと異物が挿し込まれる。

「ひうつ！」

細長いその物体は、おそらく最初に入れられたのと同じく指だろう。しかし唾液で濡れているからか、最初ほどの痛みはない。指はどんどんアクアの奥に入り込み、中を広げるようにかき回している。

その指が腹の裏を掠めたとき、ぞわりとした感覚がアクアの体に走った。

(なに？ 一瞬、変な感じが……)

アクアの反応を感じ取ったのか、指はそこを執拗しつように擦りこすはじめる。体がびくりと震え、アクアは感覚が気のせいではないと理解する。

「んっ、うんんっ」

未知の感覚に、アクアは口を引き結んで耐える。体がじわじわと温くなり、アクアの額に汗が浮かぶ。

「んっ、はぁ……。ふっ……」

アクアは感覚から逃れようと、無意識に身を振よじる。そろそろ胸の圧迫感が苦しくなってきたが、腕を後ろで縛られているため、上半身を持ち上げられない。

中を出入りする指が二本に増え、左右に大きく広げる。そこから蜜が伝う感覚がするが、アクアにはその正体がわからない。

不意に、アクアを蹂躪じゅうりんしていた指が引き抜かれる。圧迫感が消え、アクアはふーっと息を

吐く。

しかしすぐに、そこに熱を持ったものが押し当てられる。それがなんであるかを理解する前に、アクアの体に激痛が走った。

「いっ……ああっっ！！！」

ミシミシと、体が引き裂かれるような音がアクアの耳に響く。同時に訪れる圧迫感、指とは比べ物にならない。視界が白く滲み、アクアは空気を求めてはくはくと口を動かす。

（なに、これ……！　なにが入って……）

経験のないアクアには、その正体がすぐにわからなかった。記憶をたどり「子供ができる仕組み」を思い出したとき、アクアの顔から血の気が引いた。

（まさか、あれが入ってるの……！？　本当に？　こんなに痛いものなの？）

アクアが最後にそれを見たのは、本当に幼いころ、父に体を洗ってもらったときだろう。

固く大きくなると聞いた気はするが、まさかこれほどだとは思っていなかった。

(ていうか、こんなことしたら子供ができちゃうんじゃない……)

アクアは信じられない気持ちでレドラーを見上げる。レドラーはただ微笑むだけで、まったく動く様子はない。

体内を圧迫するそれが後ろに引かれ、アクアは内臓が引つ張られるような感覚を覚える。しかし今度は前に押し入り、ぐっと内臓が押し上げられる。

「あつ、うう……。ああ……。つ」

それを繰り返されるうち、だんだんと抽搐ちゅうしゅうが速くなる。アクアは顔をしかめ、痛みと異物感にぐっと耐える。

ふと、アクアは周りを囲む人々に目を向ける。無機質な壁に沿って並ぶ人々は、感情のない目でじっとアクアを見下ろしている。動物を観察するような、光のない視線がアクアに突き刺さる。

(なんで、こんなことになったんだろう……)

これは子供を授かるための行為で、愛に溢れた尊いもの。アクアは母からそう教わった。しかしここに愛はなく、子を授かる目的もない。戦争で勝つため、大きな力を得るために、アクアは尊厳を踏みにじられている。

決して許してはならない、忌むべき行為のはずなのに――

（なんで私、ちよつと気持ちいいと思ってるの……？）

スカルがアクアの中を出入りするたび、凹凸が腹の内側を擦る。その刺激に、アクアの体はびくびくと震えている。

「んっ、あつ！ あう……あつ、ああつっ！！」

口から漏れ出る吐息は、抽挿が始まったときより明らかに熱を帯びている。自分の体に裏切られたようで、アクアの瞳にじわりと熱が集まる。

スカルの動きが速くなる。拒絶していたはずの蓄^{つぼみ}は、もはやなんの抵抗もなくスカルを受け入れている。

アクアは腰をぐつつかまれ、スカルに強く穿^{うが}たれる。次の瞬間、アクアの奥にびゆるびゆると熱いものがそそぎ込まれた。

「あ……ああ……」

アクアの心が絶望に染まる。はじめてがこんな形であることも、敵の遺伝子を注がれたことも、自分の体がそれを受け入れていることも、全てが信じられなかった。

アクアの中から、一回り小さくなったスカルのものがずりと引き抜かれる。一度開かれたそこはすぐには閉じず、じんじんとした違和感が残っている。

捲られていた裾が戻され、アクアはスカルに腕を引かれて起き上がる。注がれた熱が中で動く感覚があるが、すぐに垂れてくることはなさそうだ。

レドラーは満足げに笑い、重厚な椅子から優雅に立ち上がる。

「じゃあ、早速強化された力を試そうかな。ヒーリア家の……そういえば名前を聞いてないね」

「アクア、です」

アクアは力ない声で答える。もはや抵抗する気力もない。

レドラーは笑顔を崩さず、小上がりの奥の扉を開ける。

「アクアね。君も一緒に来てくれるかな？ 面白いものを見せてあげよう」

アクアは足の拘束を解かれ、スカルに押されてレドラーの後に続く。扉の先には、上に向かう鉄の階段が延びている。

カンカンと音を鳴らして階段を上り、レドラーが扉を開ける。そこは屋上のように、ひんやりとした風がアクアの長い髪を揺らす。すっかり暗くなった空は、いつもアクアが見ている夜空より白く、星の輝きも弱い。

遠くの景色が、薄緑色の半球に覆われている。それがヴェール王国であることは、説明されなくても明らかだ。

アクアはずっと辺りを見渡す。初めて見るルベル国は不思議な国だった。ところどころに

大きな煙突が立ち、白い煙を絶え間なく吐いている。石造りの建物が規則的に並び、目に入る限り緑はない。自然豊かなヴェール王国とは、似ても似つかない景色だ。

（もともと同じ国なのに、こんなに違うなんて……）

驚くアクアを置き去りに、レドラーは屋上を囲う柵のそばに歩み寄る。アクアはスカルに背中を押され、レドラーの隣で立ち止まる。

レドラーはまっすぐに、ヴェール王国に目を向ける。

「アクア、よく見るといい。これが君の力の正しい使い方だ」

スカルがヴェール王国に向かって腕を伸ばす。スカルの手に赤い光が集まり、熱を帯びたそれは大きな球体になる。ヴェール王国に向いた面だけが、ほんの少し黒く見えるのはなんだろうか。

スカルの手から、赤い球が勢いよく放たれる。それが結界にぶつかったとき、結界は大きくひび割れ、中心が砕け散った。

（陛下の結界が……！！？）

六十年近くも国を守り続けた結界が、こんなにもあつけなく壊れてしまった。全てが破壊されたわけではない。だがこれが開戦の狼煙になることは、想像に難くない。

（私が捕まったせいで、矛の力を強化されたから……）

どうしたらいいかわからず、アクアは視線をさまよわせる。そんなアクアとは対照的に、レドラーは満足げな笑みを浮かべる。

「さあ戻ろうか。明日から忙しくなりそうだ」

レドラーが踵きびすを返し、アクアはスカルに腕を引かれて来た道に戻る。アクアは何も考えられず、心は真つ黒に塗りつぶされていた。

